視点2

農家営業を通じて学んだ視点

肴倉玉実
（団体職員）

はじめに

私は現在、一般社団法人農山漁村文化協会（以下、農文協）という、農業や地域、暮らしに関する書籍を出している出版社の事務として働いている。農文協の一番の特徴は、出版社には珍しく、書店や取次（書店に本を流通させる物流業者）に出版物を販売するだけでなく、直接個人、特に農家を職員が訪問し、出版物を販売している点だ。農文協に入ると誰もが必ず経験する「農家営業」。実際に営業で回っていた時にはとにかく余裕がなく、文句たらたらであったが、この農家営業を体験したことで、自分の足元を見つめ直すきっかけを得たことも確かである。そんな農家営業とそのための新人養成講習について今回紹介してみたい。

栂池（つが）での特訓

今や都市人口のほうが農村人口より多い時代である。農文協に入会してくる職員も、そのほとんどが都市出身者になり、農家出身は非常に少なくなってきた。二〇一〇年に入会した私の場合も同様で、出身は神戸、趣味の家庭菜園程度は体験しているが、生業としての農業とは無縁で育った。学生時代は、日本の農業というよりは、環境と開発について国際的な視点から学び、趣味の山歩きを通じて、日本の林業や里山には関心があったが、農家、農業というのはどうも身近ではなかった。そんな私と同じ年に入会した同期十四名のうち、農家の子弟は一名だけ

肴倉玉実（さかなくらたまみ）
一般社団法人農山漁村文化協会職員。2年間の営業の後、事務方を担当。山里の暮らしの知恵を学びたいこのごろ。

で、大学で農業関係を学んだ人も四名に過ぎなかった。その、農業ど素人、野菜のこともお米のこともわからない、まして果樹や畜産に至っては想像もつかないような新人をとにかく農家と話ができるようにするため、まずは四月の一か月間、長野県の栂池高原で特訓が行われる。

軍隊の訓練とか部活動の合宿みたいとよく言われる研修の一日を追ってみると、次のようになる。朝五時半ごろに起床。身支度を整え、宿舎の清掃を六時二〇分ごろまでに終わらせる。点検を受けたのち、外でラジオ体操を行い、体が十分に温まったところで、ランニング。栂池高原スキー場の一番外れの辺りまで走っていき、そこでロールプレイング。先輩職員が農家役になり、私たち新人が営業に行くという設定で行われる。例えば、草むしりをしている母ちゃん農家を見つけたという状況だと、「おはようございます！　野菜名人の〇〇さんですか？　『現代農業』の農文協です。朝早くから草むしりご苦労様です」とあいさつ。本人確認と自己紹介、相手へのねぎらいまでをよどみなく続ける。それから相手の関心、悩みなどを聞き出し、『現代農業』の記事を紹介し、最後に年間購読をお願いするクロージングまでの一連の流れを大まじめに実施する。ロールプレイングが終わると、猛ダッシュで宿舎に戻り、八時まで朝学習の時間となる。八時からが朝食で、食べ終わると、九時から途中、昼食と昼休みに開催されるバイク講習を挟んで、午後五時まで座学となる。座学が終わると、筋力トレーニングを行い、七時から夕食。そして夕食後、八時から九時までが夜の学習時間。その後、その日の報告をまとめて提出し、お風呂に入ったり課題に取り組んだりして、十一時に消灯。

この間、顔を合わせるのは、同期の仲間と養成講習の事務局、講義のために訪れる編集職員や外部講師と限られており、実際の農家には会う機会がない。しかし、日々農家や農業についての話を詰め込まれ、さらに養成講習後半からは、五月に岩手県で実施する現地実習の準備として、担当地区の農家に、このところのお天気や作業状況、集落の組織や祭りなどの行事について問い合わせをするようになると、いやが応でも気持ちが盛り上がってくる。

岩手実習

そして迎えた農家営業初日。本当に買ってくれるのだろうかという不安と、実際の農家ってどんな人なんだろうかという期待を胸に、宿を出発した。当時の日記を読み返すと、「怒涛の初日。バイクで二度転ぶ。最初に訪問した農家からキュウリ農家のイクコさんを紹介されてハウスを訪問。ヒートテック、セーター、雨具、長靴と防寒対策ばっちりで行ったものの、太陽で温められたハウスの中では、ただ暑いだけ。『そったに着込んで！』と大笑いされた。」と書いている。三年以上前の話なのだが、読みながら、転倒した砂利道、イクコさんのハウスを鮮やかに思い返すことができる。

その日の営業成績について書いていることもあるが、ほとんどがその日出会った農家のこと、風景のことで占められている。幾つか紹介してみよう。

「三軒目に訪問したマンジロウさんに叱られる。地域に対して熱い思いを持っている方なので、怒られて嫌だとか怖いとかではなく、マンジロウさんの気持ちが痛いほど伝わってくる。」「こんなにも普通に農家の庭先に牛がいるのか。」「最後に会ったおじさんの『若い時にこうしてあちこちを見て歩くのはいいことだ。そりゃ大変だよ。みんなが遊んでいる時に自分は地図を見て、明日の準備をして、何が多く作られているかも調べて。でもすごく良い経験だよ』との言葉に泣きそうになる。」「どこから来たのかと問われ、今日は盛岡の宿から来たが、本社は東京で、バイクは港区のナンバーなんですと答えると『ジャジャジャ』と驚くお母さんに会った。」「紫波最終日。出会った農家の多くが『百姓がよかった時なんてないんだよ』と口では言いつつ、この土地で精いっぱい働いて生きてきた人たち。素敵な人たちに出会えた。次の二戸ではどんな出会いがあるのか。」「朝イチにバイクで訪問した農家のおばあさん、自家製玄米ドブロクを手に『まんず味っこみてけで』と迫る。」「茄子の根元に塩をパラりとまいてやると美味しい茄子になるという話を紹介すると、真剣な顔で『ほんでなすか』と。からかわれているのかと思った。」「山あいに小さく不ぞろいな田んぼが刻まれ、老夫

婦が手植えで稲を植えていく。リンゴの花は今日が満開。その間に家や畑が点在している。こんなに美しい風景を日本の農家は創りあげ、維持してきたのかと感動する。」

実習を経て

朝の六時過ぎにはミーティングが始まり、その日に回る予定の集落や、紹介する予定の商品の設定についてチェックを受け、雨降りだろうと七時半には宿を出発し、一日外回りをする。十五、六軒の農家を訪問し、話ができる農家がそのうち十二、三軒として、契約に至るのは、一番良い時でも五軒ほど。何も契約を取れず帰る日が続くこともあった。宿に帰着後は先輩職員に今日の成果を報告し、訪問した人についての会社に出す記録をまとめ、グループ内で集めてきた話題の共有化を図り、そして明日の準備をする。週末も、次に入る地区の地図に顧客情報を書き込んだり、次の場所へ移動したりで、休みらしい休みがまったくない生活が続き、こんな仕事やってられるかと何度思ったことか。

しかし、こうやって今振り返ってみると、農家をとにかく訪ねたこの経験がいかに貴重な経験だったかがわかる。それは、カロリーベースで四割を切る食料自給率を向上させるために農業を盛り立てないといけないだとか、品質の高い農産物を生産し、利益を上げる農業を展開しようとか、環境問題について考えた時に、農業の持つ多面的機能が重要であるとか——そういった大きなことが声高に語られる今の社会において、農家と一緒に、農家の生活や自分の生活について話をする機会を得られたという小さなことである。この体験によって、農家もまた私と同様一人の生活者であるということに初めて思い当たった。そしてまた、生活者である農家が、時代や環境の変化に伴って、持てる限りの知恵と工夫をもって、その土地の自然に働きかけて生み出した農産物や風景を、私たちは享受して生きているというつながりにも意識がいくようになった。農家営業というのは、農業から農家への視点の転換を促すというのか、大きな物事を身近な視点から見る訓練をさせるものなのかもしれない。